

〔共同研究：インドネシアとの相互的文化交流に関する総合的研究〕

異郷に「ホーム」を作る

——台湾におけるインドネシア人ムスリムの活動

小 池 誠

はじめに

身近な観光地としてよく知られている台湾は、一般の日本人が知らない一面をもっている。多くの台湾人の家庭で高齢者の介護をしているのはインドネシアから来た女性の移住労働者である。朝夕の公園で高齢者が乗った車椅子を押しているインドネシア女性の姿をよくみかける。台湾の主要な駅の近くには、インドネシアだけでなくベトナムや、フィリピンなど東南アジアから働きに来た移住労働者向けの店舗や料理店が密集している地域がある。そして、インドネシア人労働者の多数を占めるムスリムが礼拝のために集まるモスクが台湾各地に存在する。

台湾で働くインドネシア人ムスリムにとって、本稿で取り上げる二つのモスクはたんに礼拝のために集まる施設ではない。モスクやそれに隣接する建物は、彼ら彼女らにとって自分たちの母語でお喋りをして、舌に合ったインドネシア料理を食べ寛げる、日常の労働の場ではけっして得ることができない安らぎを与える空間となっている。インドネシア人ムスリムは台湾という異郷のなかで自分たち自身のために、寛ぎ安心できる「ホーム」を作っている(home-making)。本稿ではインドネシア人労働者が作り出している「ホーム」がどのようにして形成され、そして、どのように使われているのか、その実態の一端を明らかにしたいと思う。

本稿では、まず第1章で、本稿で用いる「ホーム」の概念について、その理論的な背景を簡単に整理する。第2章では台湾に住むインドネシア人の概況について紹介する。その圧倒的多数は、女性の介護／家事労働者であるが、工場で働く男性労働者もいるし、また留学生も存在する。また、数は少ないが、台湾男性と結婚したインドネシア人妻も存在する。留学生とインドネシア人妻のなかには、インドネシア人労働者と深い関わりをもつ人もいる。つづいて第3章では、台湾在住のインドネシア人が結成したムスリム団体とその活動について取り上げたい。第4章では、台湾にある数多くのモスクのなかでとくにインドネシア人が活動の場としている二つのモスクに焦点を当て、その設立の経緯も含めて、どのようにしてイ

インドネシア人ムスリムにとっての「ホーム」が形成されていったのか明らかにしたい。「おわりに」では、「ホーム」という観点からインドネシア人ムスリムとモスクとの結びつきを解明したい。

本稿は、地域社会連携研究プロジェクト「インドネシアとの相互的文化交流に関する総合的研究」(13連232)の報告である¹⁾。この共同研究を開始するにあたり、研究の目的を以下のように記載している。「今回申請する地域社会連携研究プロジェクトは、これまで積み重ねてきたインドネシアの社会と文化に関する研究を継続するとともに、より効果的な文化交流の在り方を明らかにするために、日本からインドネシアへのワークキャンプと留学・研修だけでなく、日本在住のインドネシア人留学生・研修生などを研究の対象に含めていることが最大の特色である。日本とインドネシアとの間の、一方向的ではない相互的な交流をさらに進ませるために何が必要とされるか考えていきたい。」本稿で取り上げるケースは、台湾在住インドネシア人の宗教活動だが、もちろん、この問題は台湾だけに限定されることではない。台湾と比べると数は少ないが、現在、技能研修生や留学生などの資格で多くのインドネシア人が日本で暮らしている。彼ら彼女らの多くは日本社会のなかで宗教的にきわめて少数派のムスリムであるので、礼拝場所の確保、宗教的に許容されるハラール食と毎年実施される断食(puasa)は、台湾と同様に生活上の重要な問題となっている。自分たちの居場所を作ろうと、インドネシア人が中心になって建築されたモスクも、福岡などに存在する²⁾。今回報告する台湾での調査研究の成果は、日本とインドネシアのあいだの「より効果的な文化交流の在り方」を考え、さらに日本社会がインドネシア人ムスリムをどのように受け入れるかという重要な課題を考える上で、比較の材料としてとても重要なものである。今後、台湾と日本で暮らすインドネシア人ムスリムに関して比較研究を進めていきたいと考えている³⁾。

1 「ホーム」をめぐる問題

台湾の台北や高雄など主要な駅の近くに位置する、インドネシア人向け店舗が密集するエリアについて、拙稿[Koike 2015]で記述し、分析を試みた。一般的にいった、台湾の各地にあるインドネシア人向け店舗には、一つの店内で、インドネシア製の食品と化粧品などの

1) 本稿で用いられているデータは、2013年度～2015年度の共同研究プロジェクトによって得られたものだけでなく、科学研究費補助金(基盤研究(B)一般)「東南アジアにおける人の移動と帰還移民の再統合に関する社会人類学的研究」(研究代表者:首都大学東京・伊藤眞教授)によって2010～2012年度に実施された台湾調査の成果も含まれている。なお、本共同研究プロジェクトの経費によって2013年8月及び2014年8月に台湾調査を実施し、本稿をまとめる上で不可欠なデータを収集した。

2) 「インドネシアとの相互的文化交流に関する総合的研究」(13連232)の費用により、2016年3月には福岡モスクの調査を実施した。また、この共同研究プロジェクトでは、東京に住む在日インドネシア人に関する調査も実施している。

3) 2016年度からスタートした地域社会連携研究プロジェクト「インドネシアとの相互的文化交流に関する総合的研究(Ⅱ)」(16連254)でも、千葉県と東京都に住むインドネシア人ムスリムの調査を実施している。

販売、インドネシア料理（店によっては週末のみ）、雑誌・CD・DVDなどの娯楽メディア、カラオケ、インドネシア向け国際宅配・送金、携帯電話カードなど、台湾で働くインドネシア人が必要とする複数のサービスを提供する店が多い。経営者には、台湾男性と結婚したインドネシア女性が夫とともに経営しているケースや、また華人系インドネシア人男性が経営しているケースもある。このような店舗が集まっている地域は、平日は閑散としているが、休日になると多くのインドネシア人が集まって、コミュニティとしての様相を呈するようになる。2000年前後に台湾に住むフィリピン人とインドネシア人の女性労働者の調査をしたラン（Lan, Pei-Chia）は、このコミュニティの特徴を的確かつ簡潔に以下のように記述している。「台湾におけるインドネシア人労働者のコミュニティは空間的に限定され、常に活動的なエスニックな飛び地（enclave）として現れるわけではない。コミュニティの活動は間歇的、つまり平日は休止していて、日曜日だけ活動的になり、そして、そのメンバーは流動的で、ほとんどの移住労働者はコミュニティに居住してなく、休日だけ消費者としてコミュニティを訪れる」[Lan 2006: 182]。このようにエスニックな店舗が密集する地域について、アミットとラポートが書いた本[Amit and Rapport 2012]で提起されている「コミュニティ（community）」の概念を使って拙稿で取り上げた。この「コミュニティ」の概念は一般の社会科学で使われるものよりも幅広く、より多くの現象に適用可能なものである。一定の地域が永続的にある集団の活動の場となることを前提にしていないのが特徴である。

本稿が研究の対象としている「ホーム」は、上記のような「コミュニティ」よりもはるかに空間的に限定されていて、その「ホーム」に集う人々の間では相互に親密性と一体感が認められる。このような「ホーム」の概念を考えるきっかけとなったのは、上記の本の著者の一人であるラポートが編者に加わっている論集[Rapport and Dawson (eds.) 1998]である。移動が当たり前になっている現代世界において、「ホーム（home）」という概念を使って、アイデンティティの問題に迫ろうとした研究である。この概念は、前述の「コミュニティ」と同様に明確に定義された概念というよりも、新しい見方を見つけ出すための発見的な性格をもったものである。「ホーム」という概念に関連して興味深いのは、「ホーム作り（home-making）」である[Rapport and Dawson (eds.) 1998: 11]。移動を常とする現代世界において、「ホーム」はすでにあるものでも固定的なものでもなく、ある状況下で人々がメディアと資源を使って作り上げるものであり、その形成の過程が注目される。私見では、故国を離れ異郷で働く移住労働者にとって、契約労働者としてバラバラな存在のままに暮らすことを拒否し、宗教・エスニック・ナショナリティなどを結集の軸として、「ホーム」は移住先で作りに上げていくものであり、また仲間とともに努力して維持するものである。4章で詳述するように、インドネシア人労働者はイスラームという信仰に基づいて、台湾で「ホーム作り」に成功したのである。

このように人々と場所（place）との関係性を自然で自明なものとして議論することができなくなっている現代世界において、文化とアイデンティティの問題について刺激的な議論を

展開しているのが、グプタとファーガソン [Gupta and Ferguson 1992] である。この論文の結論部分で書かれているように、「私たちは現代世界においてどのように空間が再領域化されるのかを理論化しなくてはならない」 [Gupta and Ferguson 1992: 20]。本稿では「ホーム」という概念を用いようとするが、「居場所」などの用語を使って、移住者が集う場所にアプローチしたり、さらに「脱領域化」と「再領域化」という概念を使って移動と空間の問題を取り上げたりするのは、移住をテーマとする人類学や社会学ではよくみられる試みとなっている。とはいえ、すでに説明したように、本稿ではあえて「ホーム」に拘って議論を進めていきたい。

2 台湾のインドネシア人

2-1 移住労働者

最初にインドネシア労働者海外派遣・保護庁 (Badan Nasional Penempatan dan Perlindungan Tenaga Kerja Indonesia: 略称は BNP2TKI) が発表した2015年版の報告書 [BNP2TKI 2015] に基づいて、インドネシアの労働者送り出しの現状と推移について概観をまとめよう。2011年以降の年ごとの送り出し数の変化をみると、2011年が586,802人であったが、その後減少傾向となり、2015年には275,736人にまで減っている。男女比はほぼ男性4割、女性6割であり (男女比は2011年36%と64%, 2015年40%と60%), 後で述べるように、女性の介護/家事労働者の比率が高い。近年、世界中で進行している移住労働力の女性化がインドネシア人労働者についても顕著である。2012~14年について移住労働者の出身地は、西ジャワ州、中部ジャワ州、東ジャワ州という順位で、ジャワ島出身者が多数派を占めている。この報告書に宗教別のデータは掲載されていないが、このような出身地の傾向からムスリムが全体の90%以上を占めることは確実である。送り出し国は表1で示すように、東南アジアのマレーシアとシンガポール、東アジアの台湾と香港、そして中東のサウジアラビアが上位5カ国に入っている。この5カ国に、アラブ首長国連邦、カタール、韓国、アメリカ、オマーンが続く。

2015年のデータから移住労働者のプロフィールをみていこう [BNP2TKI 2015: 8-10]。職種は、家事労働者が19.0%、介護労働者が16.3%、プランテーション労働者が14.0%、工員が12.7%で、その他、船員など多様な職業が並んでいる。家事労働者と介護労働者の区別は曖昧で、一つのカテゴリーと考えた方が実態に即している。なお、プランテーション労働者はほぼマレーシアの農園で働く男性労働者である。結婚歴については既婚55%、未婚38%、離婚7%となっている。女性の既婚者の場合は夫と子どもを故郷に残しての単身での移住労働になり、彼女自身の家族の問題と深く結びついている。最終学歴は、小学校卒33%、中学校卒39%、高校卒25%、短大卒以上が3%となっている。

本稿で取り上げる台湾では、急速な経済成長に伴って労働力が不足するようになり、1990年代から正規の外国人労働者の受け入れが始まった。1991年にタイ人の建設労働者を試験的

に導入したのを皮切りに、おもに東南アジア出身の外国人労働者の総数が、1990年代後半から2000年にかけて急激に増加した。当初はタイ人とフィリピン人が中心であったが、2000年代に入りインドネシア人とベトナム人に代わった。インドネシア経済貿易代表処（略称はKDEI）⁴⁾ で入手したデータ（2010年11月）[Bidang Imigrasi 2010]によれば、第一位のインドネシア人は、外国人労働者総数378,083人のなかの154,596人（40.89%）を占めている（表2参照）。2番目がベトナム人で、以下、フィリピン人、タイ人と続いている。2012年のデータでも、この国別順位は変わってなく、インドネシア人労働者が全体の42.19%を占めている[Tseng and Lin 2014: 13]。最新のデータによると（2016年12月現在⁵⁾、インドネシア人労働者の総数は、6年間で約10万人近くも増加し、245,180人に達している。台湾の人口が約2,350万人（2016年4月⁶⁾）であるから、台湾の総人口に対するインドネシア人労働者の比率は1%を超えている。

表2に示す部門別人数は男女比を明示しているわけではないが、インドネシア人労働者に関してはほぼ「サービス部門」（86.4%）で働くのが女性で、「産業部門」（13.6%）で働くのが男性（おもに工場労働者と漁船員）である。「サービス部門」のほとんどが「介護（家庭）」という名目で働いている女性である。

インドネシアから海外に働きに出る女性労働者は、農村出身で、すでに述べたように小学校卒または中学校卒という学歴が多かった。しかし2004年に制定された法律によって、移住労働者に関する法的整備が進んだ。海外に働きに出るためには、中学校卒業で、個人雇用の介護／家事労働者の場合、21歳以上が条件と定められた⁷⁾。受入れ国である台湾の法律では、

表1 国別年間インドネシア人労働者送り出し数（上位5カ国のみ⁸⁾）

順位	送り出し先	2012年	2013年	2014年	2015年
1	マレーシア	134,069	150,250	127,827	97,635
2	台湾	81,071	83,544	82,665	75,303
3	サウジアラビア	40,655	45,394	44,325	23,000
4	香港	45,478	41,769	35,050	15,322
5	シンガポール	41,556	34,655	31,680	20,895
	総合計	494,609	512,168	429,872	275,736

4) 台湾とインドネシアの間には正式の国交が結ばれてなく、インドネシア経済貿易代表処（Kantor Dagang dan Ekonomi Indonesia）が台湾におけるインドネシア大使館のような役割を果たしている。

5) <https://simpati.kdei-taipei.org/v2/infografik#/tki>（最終確認2017年3月2日）

6) 外務省の基礎データによる。<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/taiwan/data.html>（最終確認2017年3月2日）

7) 「海外のインドネシア人労働者の派遣と保護に関するインドネシア共和国法2004年第39号（Undang-Undang Republik Indonesia Nomor 39 Tahun 2004 Tentang Penempatan Dan Perlindungan Tenaga Kerja Indonesia Diluar Negeri）」

8) BNP2TKI [2015: 9]に掲載されていた表をもとにして筆者が作成。

外国人労働者を雇うことができるのは、75歳以上の高齢者などケアを必要とする人が同居している世帯に制限されている。彼女らは日本で求められている介護士というような専門的な資格をもった介護労働者ではない。特別な資格が不要であり、おもに雇主の家庭に住み込んで高齢者の介護という名目で働きに来ている女性である。とはいえ、彼女らは介護以外に、食事の支度、掃除、洗濯などさまざまな家事や雇主の手伝い（店舗を経営している場合は店番など）を当たり前のように押し付けられているので、ここでは介護／家事労働者という表現を使うことにする。契約期間は最大3年間であり、たとえ同じ雇用者宅で働く場合でも、一度はインドネシアに帰国し、再度、契約を結ぶ必要がある。このように台湾政府は、外国人労働者の定住化を避けるために、外国人労働者に対する厳しい管理体制を取っている。

表2 台湾の出身国別外国人労働者（2010年11月現在）

	インドネシア	ベトナム	フィリピン	タイ	その他	合計
産業部門	20,949	52,778	54,489	64,633	10	192,859
%	10.86	27.37	28.25	33.51	0.01	100
サービス部門	133,647	27,018	23,306	1,252	1	185,224
%	72.15	14.59	12.58	0.68	0.00	100
合計	154,596	79,796	77,795	65,885	11	378,083
%	40.89	21.11	20.58	17.43	0.00	100

[Bidang Imigrasi 2010]

2-2 留学生

移住労働者と比べて台湾在住のインドネシア人学生数は圧倒的に少ない。また、移住労働のケースと違い、留学生の詳細に関するデータは入手が難しい。インドネシアの首都ジャカルタに設置されている台北経済貿易代表処の公式サイトによると（2016年3月現在）⁹⁾、台湾で学ぶインドネシア人留学生の総数は4,394人で、そのうち2,745人が学部と大学院レベルの留学生で、1,442人が中国語学習を目的とする留学生で、その他が交換留学生である。

インドネシア人留学生の実態については、とくに報告書などで取り上げられていないので、ここではマルディ（仮名）¹⁰⁾ というインドネシア人留学生から聞いた話を紹介しよう。彼はインドネシアの大学で機械工学を学び、現在は台北市にある臺灣科技大學修士課程で同じ分野を学んでいる。台湾の大学の先生が大学にリクルートに来て、留学することになった。留学の話聞くまで全く中国語の勉強をしたことがなく、今も中国語を理解するのは難しい。

9) http://www.roc-taiwan.org/id_en/post/50.html（最終確認2017年3月2日）

10) 1989年に西ジャワ州のボゴールで生まれた。2012年8月13日に台北のグランド・モスクでインタビューした。

台湾に来て1年が経ち、大学で教員は英語と中国語の両方を使っている。臺灣科技大學には100人位のインドネシア人の留学生がいる。台湾には華人(Overseas Chinese)のインドネシア人も含めて、2000人位のインドネシア人留学生がいる。そのなかで1,000人位がムスリムである。インドネシア人の留学生団体として、華人の留学生が中心になって在台湾インドネシア学生連合(Persatuan Pelajar Indonesia di Taiwan, 略称は PERPITA)が先に設立された。この団体とは別に、後にインドネシア留学生協会(Perhimpunan Pelajar Indonesia di Taiwan, 略称は PPI Taiwan)¹¹⁾ができた。後者が公式には華人系学生も含めて、すべてのインドネシア人留学生を含む組織という形になっている。ただし、この二つの団体は対立している。台湾に来て、宗教心が変わったかという質問に対して、マルディは次のように答えた。確かにインドネシアにいる時はムスリムばかりで「安心(aman)」だった。しかし、ここ台湾では、周囲にムスリムはいなくて、少しだけ「闘い(perjuangan)」が必要になる。しかし、キャンパス内にはハラール食堂(kantin halal)もあるし、またインドネシア人学生のために礼拝所(tempat sholat)も用意されている。要は、インドネシアにいた時と、台湾に来た後で、自身の信仰心にそれほどの違いはない。この点で、イスラームのことを知らない雇用主(majikan)の下で働くインドネシア人労働者(TKI=Tenaga Kerja Indonesia)と留学生は違う。インドネシア人労働者は「闘い」が必要になる。豚肉を無理やり食べさせられた女性労働者(TKW=Tenaga Kerja Wanita)¹²⁾のような事件も起きている。

以上紹介したようなマルディの語りは彼独自のものではなく、他のインドネシア人留学生からも同様の趣旨のことがしばしば聞かれる。厳しい労働条件の下で働く移住労働者と比べて、留学生ははるかに恵まれた立場にあることは確かである。留学生のなかには、積極的に移住労働者、とくに様々な事件に巻き込まれた女性労働者のために活動する留学生も存在する。その場合、3章で取り上げるムスリム組織がその活動の母体となることが多い。

インドネシア人留学生、とくに理工系の留学生のなかにはそのまま台湾に残って専門職として企業で働くインドネシア人もいる。また、インドネシア人移住労働者向けのインドネシア語誌の編集・出版や、その他のインドネシア人向けエスニック・ビジネスに関わる元留学生も存在する[小池2012参照]。このような職業に従事する場合は、移住労働者とはまったく別の労働許可が与えられるので、3年間というような期限付きではなく、長期の台湾在住が認められることになる。このように台湾での在留資格が安定したインドネシア人のなかには、移住労働者のための社会活動する者もいる。

台湾の大学で修士課程を修了し、インドネシアに帰国しないで、台湾の会社でデザインの仕事をしているヤント(仮名)のケースを紹介しよう¹³⁾。中部ジャワ州のスマランの生まれ

11) PPIは各国にあるインドネシア人留学生の公的な団体である。日本には在日インドネシア留学生協会(Persatuan Pelajar Indonesia Jepang)が組織されている。この協会は、さらに各地方支部に分かれている。また、各国にあるインドネシア留学生協会が合わさった世界インドネシア留学生協会(Persatuan Pelajar Indonesia Dunia)も存在し、毎年、世界大会を開催している。

12) インドネシア語では海外で働く移住労働者を指してTKIとTKWという略語がしばしば使われる。

で、インドネシアの大学で電気工学を学んだ。2012年に台北に来て大学院に入学した。もうすぐ契約が切れるが、延長が決まり2016年まで台北で働く予定という。インドネシアで大学に通っていた時はイスラムの活動に参加したことがなかった。友だちに誘われることもなかった。しかし、台湾ではイスラム団体に参加するようになった。周りがイスラムではない台湾人ばかりだと、信仰心が強まるという側面があるとヤントは語っていた。留学生の時から、大園で働くインドネシア人労働者と関わりを持っていた。今は、アト・タクワ・モスク（4-3で詳述）の役員（Pengurus）の1人に名前を連ねている。

2-3 結婚移民

「2-1 移住労働者」で説明した外国人労働者が台湾に流入した移民の第一波だとすると、女性の結婚移民が第二波といえる [Tseng and Lin 2014: 13]。地方の農村部の男性とか、工場労働者など、社会経済的に比較的恵まれていない台湾男性の結婚難に伴い、1990年代以降、台湾人と結婚する中国と東南アジア出身の女性が急増した [Tseng and Lin 2014: 14-15, 徐 2014]。台湾における国際結婚のピークは、2003年で、その年の全婚姻件数の31.86%、つまり54,634件が国際結婚である。その内、89.02%が台湾男性と外国籍女性との結婚件数である。外国人配偶者の出身地域をみると、全国際結婚件数の31.76%が東南アジア出身者との結婚である（件数の63.49%が香港・マカオを除いた中国出身者） [Tseng and Lin 2014: 14]。統計上、この数字には男女双方が含まれているが、上で示したようにそのほとんどが台湾男性と結婚した女性である。2015年11月現在、婚姻により台湾に移住してきた女性と男性の総数（台湾国籍を取得した者と外国籍を保持した者の合計）は、509,363人（男性が39,531人で7.76%、女性が469,832人で92.24%）であり、そのなかで中国出身者（香港・マカオを含む）が343,790人で、それ以外の国の出身者が165,573人である。台湾男性と結婚した外国籍女性に限ると、中国以外の国の出身者のなかで1位がベトナム人で92,633人、2位がインドネシア人で28,085人、3位がフィリピン人で7,733人、4位がタイ人で5,814人、5位がカンボジア人で4,280人となっている¹³⁾ [中華民國內政部戸政司 2015]。

民族に関する統計がないので明言はできないが、台湾男性と結婚した東南アジア出身者のなかで、各国の華人系女性の比率が高いと考えられる [Cheng 2014: 135]。これは台湾男性が、華人 (Overseas Chinese) に対して文化的な近さを感じるためである。インドネシアについていえば、台湾とインドネシアを繋ぐ商業的な結婚のルートに従い、西カリマンタンのシンカワン出身の華人女性が数多く台湾男性と結婚している。このような民族的な背景があるため、台湾男性と結婚したインドネシア人のイスラム女性の割合は低いと想定される。少数派であっても、4章で取り上げるようにモスクを建てるために尽力したインドネシア女性

13) 聞き取りは2014年8月23日に行われた。

14) ちなみに、台湾人と結婚し台湾に居住する日本男性が2,112人で、日本女性が2,415人であり、女性の比率が高い、本文で紹介した東南アジア出身者とは明らかに結婚のパターンが異なる。

も存在する。

インドネシア人妻のあいだでムスリム女性は少ないが、インドネシア人の移住労働者と関わりをもつ女性も多い。台湾の各都市には駅前を中心に多くのエスニック店舗・料理店が並んでいる一画がある [小池 2012]。経営者には、台湾男性と結婚したインドネシア女性が夫とともに経営しているケースが多く、彼女らはインドネシア人労働者と台湾社会のあいだを結ぶつなぎ役を果たしている。

3 インドネシア人のムスリム団体

台湾におけるインドネシア人移住労働者の社会活動を考える上で、ムスリム団体の概要を理解することが不可欠である。台湾に住むインドネシア人ムスリムは、それぞれの居住地で団体を組織して、インドネシア人のムスリム同胞のための宗教活動と社会活動を行っている。ムスリム団体が、インドネシア人労働者が参加する大規模なイスラームの集会を組織している。この章では、移住労働者と留学生に分けて、それぞれの宗教活動について紹介したい。

3-1 移住労働者の組織

台湾のインドネシア人ムスリムを代表する組織として、KMIT (Keluarga Muslim Indonesia di Taiwan, 在台湾インドネシア・ムスリム家族) が2007年に創立された。「同じ運命と責任という感情にもとづき (Dilandasi atas rasa senasib sepenanggungan)」, インドネシア人移住労働者だけでなく留学生の団体も含めて、台湾に存在するすべてのイスラーム団体を覆う「傘 (payung)」となる団体である¹⁵⁾。台北・台中・台南・高雄など台湾各地にあるインドネシア人のムスリム団体の一つが中壢市にある FOSMIT (Forum Silaturahmi Muslim Indonesia Taiwan, 台湾インドネシア・ムスリム親睦フォーラム) である¹⁶⁾。KMIT は統括団体であり、実際の諸活動は FOSMIT のような地域に基盤をもったインドネシア人ムスリム団体が担っている。FOSMIT の目的は、イスラームの教えに基づきインドネシア人ムスリムの相互親睦のための組織であり、同時に労働者の啓発活動 (membina pekerja) も行っている。FOSMIT の正規のメンバーは男性の工場労働者を中心に、30~40人位である。中壢のある桃園県 (現在は桃園市) には工場が多いのでインドネシア人の男性労働者が数多く働いている。FOSMIT の定期活動としては毎月第3日曜日に集まってイスラーム講話 (pengajian) を開催している。女性も参加しているが、決まった日に休日が取れる男性の工

15) 以下のような FOSMIT のウェブサイトによる。“Dilandasi atas rasa senasib sepenanggungan, beberapa organisasi muslim yang tersebar di Taiwan, mendirikan sebuah organisasi yang diharapkan bisa menjadi payung tertinggi semua organisasi muslim di Taiwan, baik yang dibentuk oleh Buruh Migran Indonesia (BMI) Taiwan, maupun oleh Mahasiswa Muslim yang sedang menuntut ilmu di Taiwan.” (<http://kmitw.org/tentang-kami.html>, 最終確認2013年2月27日)

16) おもに2010年2月1日に中壢モスク (中壢龍岡清真寺) において FOSMIT の会長であり、同時に KMIT の会長 (初代と三代目の会長) も兼ねていた男性から聞いた話に基づいている。なお、FOSMIT と KMIT の活動については、小池 [2013] ですでにまとめている。

場労働者と比べて、雇主の家に住み込みで介護／家事労働者として働く女性は、定期的に休日を取ることが難しいので、このような日常の活動に参加することはまれである。女性労働者に代わって留学生のインドネシア女性が FOSMIT の活動の手伝いをしている。

FOSMIT は、毎年「大布教活動 (Tabligh Akbar)」を開催して数千人のインドネシア人労働者を集める¹⁷⁾。その際、中壠の龍岡モスクではスペースが限られているので、一般の学校を会場に使うことが多い。2010年10月17日には「大布教活動」が中壠市で開かれた。その時、ゲストとして招かれた Aa Gym というイスラーム説教師 (pendakwah) は、インドネシアのテレビにしばしば出ている有名な人物である。また、2011年2月6日に旧正月 (2月3日) の後の休日を利用して、「大布教活動と国のための祈り (Tabligh Akbar dan Doa untuk Negeri)」を中壠市内にある中学校を会場として実施された。このようなイスラーム集会でインドネシアから宗教指導者を招くだけでなく、歌手やバンドを呼ぶことが普通である。箱 (kotak) をおいて、義捐金という形で、集まったインドネシア人から募金を集めるやり方をしている。歌手を呼ぶのは多くのインドネシア人を動員するために必要である。FOSMIT の場合、このようにして集まった金額をインドネシアの孤児院建設のための資金に充てている。また2010年の集会で集まった資金は、当時、多くの関心を集めていたムラピ山の噴火とムンタワイ諸島を襲った津波の被害者のために使われ、援助物資をインドネシアに送った。

KMIT の下にあるムスリム団体とその他のインドネシア人の組織が協力して、2012年8月19日の断食明けのイドゥル・フィトリ (Idul Fitri) の時に台北中央駅で断食明けの集団礼拝 (Sholat Ied) を実施した。KMIT のほかに、主催者として、FORMMIT (留学生のムスリム団体、次節で説明) と、MTYT (Majelis Taklim Yasin Taipei, 在台北タクリム・ヤシン委員会)、PCI NU Taiwan (Pengurus Cabang Istimewa NU Taiwan, ナフダトゥル・ウラマ台湾特別実行支部)¹⁸⁾、KDEI (インドネシア経済貿易代表処)、IPIT (Ikatan Pekerja Indonesia di Taiwan, 台湾インドネシア労働者連合) の名前がポスターに挙げられている。集団礼拝の後、台北中央駅の近くの公園でインドネシア人向けの企業が資金を出して、インドネシアからダンドゥット¹⁹⁾の3人組女性グループ Trio Macan を呼び、コンサートが開かれた。ポスターには“Semarak Kemerdekaan di Taipei Bersama” (ともに独立²⁰⁾を輝かそう) と書かれ、イドゥル・フィトリにはまったく触れていない。イスラーム集會に参加したインドネシア人労働者にとって一連のイベントであるが、この女性グループはセクシーな振り付けのダンスを売りにしているので、イスラーム集會の主催者側にとっては別々のイベントということになっている。

17) このようなインドネシア人ムスリムの大規模な集會は中壠だけのことではなく、台湾の各地で開催されている。

18) ナフダトゥル・ウラマ (Nahdatul Ulama, 「ウラマの覚醒」, 略称は NU) は、1926年にインドネシアの東ジャワで結成された保守派のムスリム団体である。ナフダトゥル・ウラマは改革派のムハマディヤ (Muhammadiyah) と並んで、インドネシアを代表するムスリム団体である。

19) ダンドゥットはインドネシア独自のポピュラー音楽のジャンルである。

20) 毎年、8月17日がインドネシアの独立記念日である。

3-2 留学生団体の活動

台湾で働くインドネシア人のムスリム団体の活動にとって留学生との協力が欠かせないので、この節では台湾にあるインドネシア人留学生団体の活動についてまとめる²¹⁾。インドネシア人留学生のなかでムスリムが集まって FORMMIT (Forum Mahasiswa Muslim Indonesia di Taiwan, 在台湾インドネシア・ムスリム学生フォーラム) が結成された。メンバーは200~250人位である。1年に1回か2回、総会が開催される。台湾各地からインドネシア人留学生が集まるのは難しいので、FORMMIT は台湾全体を5つの地区に分けて、地区単位で平常の活動を行っている。FORMMIT の活動は、国際会議担当 (日本など台湾以外の国のインドネシア留学生を招いて会議を開く)、ディスカッション担当、メディア担当、財政担当、広報担当、啓発活動担当、SPM (Syiar Pelayanan Masyarakat, 社会サービス広報) などの部門に分かれて、活動を実施している。このなかで SPM がインドネシア人労働者 (TKI) を対象とした活動を実施している。問題を抱えた外国人労働者向けのコール・センターを持っている。台湾の労働省が行なっているコール・センターの番号1955に電話しても何の対応がない時、SPM に連絡してくる。また、各地区のイスラーム講話 (pengajian) の時に、問題を抱えているインドネシア人労働者の相談を受けることがある。このような時に、SPM のメンバーの何人かが、その労働者のために働くことになる。法律上の問題で自分たちでは埒が明かない時には、インドネシア経済貿易代表処 (KDEI) に任すことになる。また、FORMMIT はインドネシア人労働者のためにさまざまな講習 (pelatihan) を開いている。台北ではコンピューターと英語のコースを開いている。その他、FORMMIT の各地区支部が中国語などインドネシア人労働者向けの講習会を実施している。

4 モスクに集うインドネシア人

4-1 台湾のモスク

台湾にあるモスク (中国語で清真寺, インドネシア語で mesjid または masjid) は以下の7つである。台北市には、台北グランド・モスク (台北清真寺, 1960年創建) と台北文化モスク、桃園市には中壢区の龍岡モスク (龍岡清真寺) と大園區²²⁾ のアト・タクワ・モスク (Masjid At-Taqwa, 2013年創建)、台中市には台中モスク (台中清真寺)、台南市には台南モスク (台南清真寺)、高雄市には高雄モスク (高雄清真寺) がある。このなかで、アト・タクワ・モスクは後で述べるようにインドネシア人が創建したモスクであるが、それ以外の6つのモスクは台湾人のムスリム (中国語で回民) のためのモスクであり [木村 2009a: 72], 現在では台湾人ムスリムだけでなく、多様な国々から台湾に来たムスリムのための礼拝の場となっている。このなかで、台北グランド・モスクは1960年にサウジアラビア王国の協力に

21) おもに2012年8月13日に台北のグランド・モスクで会った FORMMIT の会長であるマルディ (2-2で取り上げた) とのインタビューで聞いた話にもとづいている。

22) 2014年8月に調査した段階では桃園県大園郷だったが、後に桃園県が直轄市となり、桃園市大園区になった。

よって建設された [木村 2009a: 79], 台湾でもっとも古く, 大きなモスクである。台北とその周辺に住むインドネシア人労働者や留学生は, 金曜日の礼拝などのため台北グランド・モスクか台北文化モスクに集まる。台北以外の台湾の主要都市である台中・台南・高雄にそれぞれモスクが一つずつあり, さらに国際空港があり, 台湾有数の工業地帯である桃園市に二つのモスクが建っている。

台湾人ムスリムは, 二つのグループに分けることができる。最初のグループは1945年から1949年にかけて中国大陸から台湾へ移住してきた, イスラームを信仰していた国民党の支持者や国民党軍の軍人とその子孫である (台湾における外省人の一部を成す)。第二のグループは, 国共内戦時にタイやビルマ, トルコなど第三国へ逃れ, その後, 中華民国政府の華僑帰国政策に乗じて台湾へ移住してきた人々である。とくに1940年代後半から50年代に雲南省からビルマ・タイへ逃れた雲南系ムスリムとその子孫が多い [木村2003: 51-52]。台湾人ムスリムに関する正確な統計はないが, その総数は1万人程度と推定されている。台湾ムスリムの組織として, 台北グランド・モスク内に併設されている中国回教協会がある [木村 2009a: 72]。

4-2 中壢の龍岡モスク

筆者が中壢の龍岡モスクを初めて訪ねたのは2010年2月1日のことである。そこで, 当時FOSMITの会長であり, 同時にKMITの会長(初代と三代目の会長)も兼ねていた男性ラーマン(仮名)²³⁾と会い, この二つの団体を始めとして台湾のインドネシア・ムスリム団体の活動について話を聞くことができた。その後, 2014年8月24日に再訪し, 董事長(英語でPresident)を務める馬氏²⁴⁾から, このモスクの歴史なども含め話を聞くことができた²⁵⁾。この地域に住むムスリムはモスクがなかったため, 1956~59年は礼拝のために台北まで行かなければならなかった。そのため1962年に最初のモスクを建て始め, 1964年に木造のモスクが完成した。モスクのためにムスリムの8~9家族が寄付を集め, 390坪(ping)の敷地を買った。当時のモスクは100人位が入れる広さだった。1982年頃から建物が古くなり雨漏りがするようになったため, 恒久的な建物を建てることにして, 1989年に現在のモスクが完成した。このモスクに登録されているムスリムの数は, 314家族である。桃園市(以前は桃園県)一帯に住み, 多くが中壢区にいる。現在, その大多数は台湾生まれの, 移民第二, 第三世代になっている。

馬氏のルーツは中国南西部の雲南である。中国共産党との戦いの後, 父親がミャンマーに

23) この人物は小池 [2013] ではABという仮名を使い, その出身地などライフ・ヒストリーも含めて紹介し, 彼を中心とする団体の活動についてまとめている。

24) インフォーマントの個人名は論文では仮名を使うのが一般的だが, 馬という姓は彼のルーツを示す重要な名前であるので, 本稿では敢えて実名を使っている。

25) 筆者は中国語が話せないため, 調査助手を務めた華人系インドネシア人留学生に中国語からインドネシア語に通訳してもらい, インタビューを進めた。

移り、彼自身はミャンマーで生まれ、ミャンマーの学校に通った。1980年頃に台湾に来た。このモスク（正式には財団法人龍岡清真寺）の理事長は4年ごとに交代することになっている。インフォーマントの馬氏は第7期の理事長に選ばれた。第8期の理事長に選ばれた人は、それほど役職に向いていなかったため、その人の残り2年の任期を引き継ぎ、さらに第9期の理事長にも選ばれた。馬氏の子どもは、外資系の企業や航空会社に勤務し、この近くには住んでいない。

毎週土曜日と日曜日にモスクの敷地内にある建物で、台湾人ムスリムの子どものためのクルアーンを学ぶ教室が開かれている。幼稚園クラスと、小学校クラス、中高クラスに分かれてクルアーンを読み方を勉強し、合計70～80人が学んでいる。ここでイスラームの宗教教育を受けた子どものなかには成人後、サウジアラビア政府から奨学金をもらい、サウジアラビアに留学したムスリムが5、6人いる。また、サウジアラビア留学から戻って、外務省の役人となった人もいる。このモスクのイマーム²⁶⁾（中国語で教長）はミャンマー生まれで、エジプトの大学に留学しイスラームを学んだ。また、副イマームの馬氏もミャンマー生まれで、シリアの大学に留学し、卒業後、このモスクの副イマームとして招かれた。年齢は36歳（2014年の調査時）で、10年間ここにいる。ちなみに妻もミャンマー生まれである。このようなルーツをもつ宗教指導者がいるのは、この龍岡モスクだけの特徴ではない。台湾にある他のモスクでもタイやミャンマーから招聘された雲南ムスリムが指導者を務めている [木村 2009b: 248]。

写真1 子ども向け教室（教師は副イマームの馬氏）



26) イマームは集団礼拝の時に最前列で礼拝の手本を示す指導者を意味する [大塚ほか編 2002: 168]。

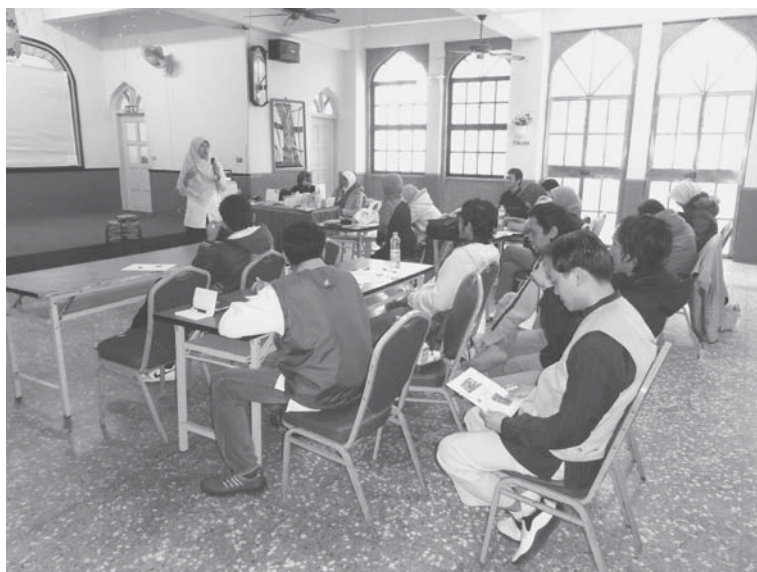
このように中壠龍岡清真寺という中国語名をもつモスクは、もともと台湾人のムスリム、とくに雲南系の人々によって創建された。中華民国としての台湾と中華人民共和国の対立関係、そしてその両国にタイやミャンマーなどの東南アジアの国々が絡むグローバルな関係性のなかで [木村 2009b 参照]、居場所を求めて移動を続けて、最終的に台湾に移住し、そして中壠という地域に自分たちの「ホーム」を作りあげた雲南ムスリムにとって、この龍岡清真寺はアイデンティティの拠り所となり、まさに「ホーム」のなかの「ホーム」とも呼べる重要な空間であったはずである。しかし、前述のインドネシア人労働者、ラーマンによると、モスク周囲に住む雲南系ムスリムの数が減少し、あまり使われなくなったので、一部の建物をインドネシア人の団体である FOSMIT が事務所として利用するようになった。彼によると、モスクの本来の所有者である台湾人のムスリムにとって、掃除などモスクの管理をしてくれるインドネシア人は感謝されているという。私が2010年、最初にモスクを訪ねた時は、インドネシア人が集まる一室がまるでインドネシアであるかのような空間になっていた。FORMMIT のスタッフである女性留学生が作ったインドネシア料理をみんなで食べながら、狭い部屋の中でインドネシア語でお喋りし寛いでいた。みんなは労働の現場や大学の研究室でムスリムでない台湾人と過ごしている時には得ることができない親密性を感じているようだった。一方、2014年に董事長の馬氏に聞くと、インドネシア人ムスリムとは必要な時に助け合っている関係だと答えていた。インドネシア人のために部屋を提供しているが、電気代などはインドネシア人が出している。

龍岡モスクの建物を使って、FOSMIT を中心とするインドネシア人は台湾在住のインドネシア人ムスリムのための活動を展開している。その一例として、2011年2月3日（春節の休暇中）に開催された「書くために闘い、闘うために書く (Berjuang untuk Menulis, Menulis untuk Berjuang)」という FOSMIT と FORMMIT の協力で開催された作文講習会の概要を紹介する（詳細は小池 [2013] 参照）。参加者はインドネシア人労働者と留学生で、合計約20人であった。講習会の概要は以下の通りである。最初に FOSMIT のスタッフである男性労働者がクルアーンの一節を朗読し、つづいてラーマンが FOSMIT の会長として開会の挨拶をした。そのなかで「台湾で働きながら、私たちは学問も求めよう (Kita menuntut ilmu, sambil bekerja di Taiwan)」、また「カラオケだけでなく勉強して欲しい、この機会を生かして欲しい」という内容の挨拶であった。次に、インドネシアのジョクジャカルタに住む男性講師（イスラーム関係の本の著者）によるスカイプを使った講義「紙の上で踊る：忙しさは書くための障害にならない (Menari di Atas Kertas: Sibuk bukan Halangan untuk Menulis)」が始まった。昼食後、すでに台湾の出版社から短編小説集を出版している女性労働者ジェニー・エルフィナ (Jenny Erivina)²⁷⁾ による「書くことを誰も恐れることはない (Menulis siapa takut)」という彼女自身の経験も交えた講演があった。その後、参加者各自が短編小説

27) これは出版された短編集、『少女は処女でない (Gadis Bukan Perawan)』で使われているペン・ネームである。

(cerpen) を書き、その後3つのグループ（女性2グループと男性1グループ）に分かれて、それぞれが書いた内容について互いにディスカッションした。それをジェニーやインドネシア語誌『インド・スアラ (Indo Suara)』²⁸⁾の編集長などゲスト講師が入ってアドバイスする形で講習会が進んだ。参加者が書いた作品から優秀作が選ばれ、それが読み上げられた。最後は、スタッフによる講習会の講評があり、全体で5時間程度の講習会が終了した。

写真2 作文講習会の参加者



この講習会には、4つの立場の人が関わっている。主催者であり準備を担当した FOSMIT の労働者スタッフ、そして FORMMIT の学生スタッフ、講師として招かれた『インド・スアラ』の関係者、最後に受講者であるインドネシア人の移住労働者である。FOSMIT のスタッフは男性労働者で学歴は高校卒が多い。それに対して FORMMIT のスタッフの多くは女性の留学生（学部レベルと大学院レベル）で、このような講習会を進める上での知識や経験をもっている。FOSMIT の実行力と資金、それに FORMMIT で活動している学生の学術的なノウハウが加わって、上記のような講習会が可能になったといえる。それぞれ単独の力だけでは開催は容易でなく、労働者と留学生の協力が講習会の開催には不可欠である。さらに、インドネシア語誌の編集スタッフが加わることによって、講習会の内容はよりレベルの高いものになった。

龍岡モスクは二重の意味での「ホーム」になっている。第一に、これは移住を重ねた雲南系ムスリムが自分たちの礼拝の場所として建てたモスクである。金曜日には多くの台湾人ムスリムが集まって金曜礼拝が行われるし、また、土曜日と日曜日には子どもたち向けに、ア

28) 雑誌名の意味は「インドネシア人の声」である。おもに台湾で働くインドネシア女性向けに2006年に創刊された、台湾で発行部数がもっとも多いインドネシア語誌である（詳細は小池 [2012] 参照）。

ラビア語のクルアーンが正しく朗読できる、良きムスリムになるための教室が開かれている。第二に、龍岡モスクは一義的には台湾人ムスリムのためのモスクであるが、もちろんモスクである以上、特定のムスリムだけでなく、広くムスリム一般に開かれた宗教施設である。台湾で進むグローバル化の過程で、台湾で生活するパキスタンやアフリカ諸国出身のムスリムも、金曜礼拝やイスラームの祭日には、龍岡モスクに集う。台湾人ムスリム以外のムスリムのなかでもっとも人数が多く、宗教活動が活発なのはインドネシア人ムスリムであり、彼ら彼女らは、龍岡モスク内の空いた部屋を借りて、そこを拠点にして、このモスクを自分たちの「ホーム」に作り上げている。「ホーム」という概念は、一つの空間が同時に複数の集団にとっての「ホーム」となることも十分に許容している。インドネシア人ムスリムはこのモスクを乗っ取るわけではなく、モスクの設立者であり、その管理者である台湾人ムスリム(団体としては財団法人龍岡清真寺)と共存しながら、自分たち独自の宗教的そして社会的な活動を展開している。

4-3 大園のアト・タクワ・モスク

桃園市大園区にあるモスクは、台湾にある他のモスクと違って、インドネシア人によって創建されたものである。インドネシア女性シティ(仮名)と、その夫である台湾男性(ムスリムに改宗)が中心となり、インドネシア人労働者から寄金を集め、アト・タクワ・モスクが2013年6月9日に正式に竣工した[Retno 2014: 17]。モスクは大園の工業地帯の一画にある。敷地の右端にモスクがあり、その入り口の上には、上から中国語(大園清真寺)とアラビア語、インドネシア語(Masjid At-Taqwa)で名称が書かれている。モスクの1階が男性用の空間で、2階が女性用の空間になっている。モスクの隣が浄め場(インドネシア語で tempat wudu)で、そして左端がインドネシア人向けの店舗(Toko Indonesia)と食堂になっている。

店を経営しているシティはもともと中部カリマンタン州の生まれで、その後、東ジャワ州のトゥバン(Tuban)に移った。シティは移住労働者として台湾の工場で働いていた時に、工場の上司だった今の夫と知り合った。彼はトゥバンでイスラームに改宗し、二人はイスラーム式の結婚式を挙げた²⁹⁾。その後、夫は台湾人の友人に改宗のことを責められ、酒を飲んだりしたが、だんだんと良いムスリムになり、最後は夫婦で協力してモスクを建てるようになったという³⁰⁾。もともと店舗の2階を宗教的活動に使っていたが、多くのムスリムが集まることのできる礼拝の場所を自分たちで作ろうというインドネシア人労働者の熱意が高まった結果、モスク建設の動きが始まった[Retno 2014: 46]。最大の問題は資金であった。土地の

29) 台湾の法律上、労働者として働いているインドネシア人は契約期間中、台湾人と結婚することができない。契約終了後、一度インドネシアに帰ってから結婚のための手続きを始めなくてはならない。

30) 2014年8月23日にアト・タクワ・モスクで調査した時、シティとその夫はインドネシアに出かけていて、留守だった。そのため、モスクにいたインドネシア人の宗教関係者などからモスク創建の経緯などを聞いた。また、Retno [2014] も参考にしている。

代金（260万 NTD）と建築費（640万 NTD）を合計して900万 NTD（約3240万円）もの経費が掛かった。まだ土地代が借金として残っているため、このモスクで色々なイスラームのイベントを企画して寄金を集めている。

このモスクのイマーム (imam) を務めているインドネシア男性は、1975年に東ジャワ州のマディウンで生まれた。当初マレーシアで働き、結婚後、2006年から台湾の中壢で工場労働者として働いた。6年間働き、インドネシアに戻った。東ジャワ州のスラバヤでシティに会い、このモスクの指導者を務めて欲しいという彼女の求めに応じて、また台湾に働きに来ることになり、1年近くが経ったという。イスラームの宗教指導者という資格でインドネシア人が台湾に滞在することは難しいので、このイマームのような移住労働者にモスクの指導者という役割を任せることになる。彼が勤めている工場はモスクから1km位の距離にあり、仕事が終わった後、バイクで来てマグリップ（夕方）の礼拝をモスクでするのが日課になっているという。

写真3 アト・タクワ・モスクの入口



このモスクでは、毎週土曜日の夜に近隣の工場で働くインドネシア男性の労働者が集まってヤシン³¹⁾朗誦会 (Yasinan または Pembacaan Surat Yasin) が開かれている。ヤシン朗誦会

31) ヤシン（辞典の表記ではヤースィーン）は『クルアーン』の第36章で、アッラーの啓示の核心部分を説く重要な章である [大塚ほか 2002：1016]。

写真4 アト・タクワ・モスク内でのルバナの練習



は、ムスリム一般というよりも、インドネシア人ムスリム、とくに東ジャワ州で影響力をもつナフダトゥル・ウラマ系のムスリムが頻繁に実践するものである [Retno 2014: 69]。筆者が調査した日は土曜日だったので、その様子を最初から観察することができた。ヤシン朗誦の前に、12~13人が参加してルバナ (rebana, 片面太鼓) を叩きながら、アラビア語で歌う宗教音楽の練習が始まった。これはルバナと呼ばれる音楽で、インドネシアのいくつかの地域で演奏されている。このモスクに集まる労働者は東ジャワ出身者が多いので、東ジャワに特徴的なスタイルで演奏されるという。21時頃から朗誦会が始まった。最初に司会の挨拶があり、続いて、ここのイマームがヤシンの朗誦を始め、それに合わせて参加者全員 (合計18人) が朗誦した。21時半過ぎから、イマームとは別の宗教指導者であるウスタッド (Ustad) がインドネシア語ではなく、おもにジャワ語を使って、説教を始めた。筆者は途中でモスクを離れたが、明日は日曜日のため、参加者のなかには朗誦会が終わっても仲間とお喋りを続け、このモスクに泊まる者もいるという。

筆者は、ヤシン朗誦会の場にインドネシア人労働者とともに参加している間、ここが台湾だということをしばし忘れそうになってしまった。あたかも彼らはそれぞれの故郷にいるかのように、ルバナで演奏し、ヤシンの章句を唱え、そしてジャワ語で語られる説教を聞いていた。また、朗誦会の前には、隣の食堂でインドネシアの料理を食べていた。このモスクの室内は、彼らにとって「ホーム」と呼べるような空間になっていた。もちろん筆者が調査した日は限られた人数の男性参加者しかいなかったが、毎週金曜日の礼拝や、断食月 (ラマダン) の期間、断食明けのイドゥル・フィトリなど、ムスリムにとって宗教的に重要な機会には、より多くのインドネシア人ムスリムがこのモスクに集まり、ともに礼拝を実践するので

ある。上記のような大規模な礼拝に際しては、普段は介護／家事労働者として働き、金曜礼拝に参加することができないインドネシア女性もモスクに集まってくる（2階が女性のための礼拝の空間となっている）。このアト・タクワ・モスクは、インドネシア人労働者にとって「ホーム」となっている。

おわりに

本稿では、台湾在住の多様なインドネシア人と、そのなかのムスリムが結成している団体についてまとめた後、筆者が実際に調査する機会を得た中壙の龍岡モスクと大園のアト・タクワ・モスクに焦点を当て、インドネシア人ムスリムにとっての「ホーム」がどのようにして形成され、そしてそこで実施されている活動の一端を紹介した。この二つのモスクは対照的である。龍岡モスクは、もともとは台湾に移住してきた雲南系ムスリムが自分たちの信仰の「ホーム」として建築したものである。その一角を間借りして、インドネシア人ムスリムが自分たちの「ホーム」を作り上げ、そこを活動の場として、ムスリム団体が宗教的・社会的活動を実施している。一方、アト・タクワ・モスクは、台湾男性と結婚したインドネシア女性（もともとは工場労働者）が、インドネシア人労働者と協力して資金を集め、建築したものである。台湾におけるインドネシア人ムスリムの「ホーム作り」が顕著な形で成果を上げた稀有な例となっている。このモスクでは、インドネシア人労働者一般というよりも、とくに東ジャワ出身者の「ホーム」となっていて、イスラームの説教がインドネシア語ではなく、ジャワ語で行われていた。エスニック・アイデンティティの点で、より限定された「ホーム」となっている。

ここでは、二つのモスクの事例を取り上げたが、モスクよりもより小さく、簡素なレベルの礼拝所（mushola）がインドネシア人の男性労働者が数多く集まる地域にある。礼拝所は、個別の建物というよりも、インドネシア人向け店舗の一室を間借りするような形で存在し、インドネシア人ムスリムが集まることができる「ホーム」となっている。インドネシア人ムスリム一般にとっての「ホーム」を議論の対象にしようとしたら、このような礼拝所も対象に含める必要がある。

本稿は地域社会連携研究プロジェクトの報告書として書かれたものである。そのため、「ホーム」やそれに関連する概念に関する理論的な考察も十分ではない。また、本稿のもととなったデータも短期間の台湾調査で得られた、不十分なものであり、もっと明らかにしなくてはいけない点が多い。たとえば、龍岡モスクとアト・タクワ・モスクという場所について、インドネシア人ムスリム自身の言葉でもっと詳細に描き出す必要がある。ただ、本稿を通して、読者が台湾でインドネシア人ムスリムが作り出した「ホーム」について少しでも理解が進めば、本稿は当初の目的をいちおう達成できたと考えている。

参考文献（英語・インドネシア語）

- Amit, V. and N. Rapport, 2012, *Community, Cosmopolitanism and the Problem of Human Commonality*, London: Pluto.
- Bidang Imigrasi, 2010, *Data Statistik Warga Negara Indonesia di Taiwan*, Taipei: Kantor Dagang dan Ekonomi Indonesia di Taiwan.
- BNP2TKI, 2015, *Data Penempatan dan Perlindungan Tenaga Kerja Indonesia Tahun 2015* <http://www.bnp2tki.go.id/read/11034/Data-Penempatan-dan-Perlindungan-TKI-Periode-Tahun-2015.html>（最終確認2016年7月3日）
- Cheng, I., 2014, Home-going or Home-making? The Citizenship Legislation and Chinese Identity of Indonesian-Chinese Women in Taiwan, in Chiu, K., D. Fell and Lin P. (eds.), *Migration to and from Taiwan*, Abingdon: Routledge.
- Chiu, K., D. Fell and Lin P. (eds.), 2014, *Migration to and from Taiwan*, Abingdon: Routledge.
- Gupta, A. and J. Ferguson, 1992, Beyond “Culture”: Space, Identity, and the Politics of Difference, *Cultural Anthropology* 7-1: 6-23.
- Koike, M., 2015, Indonesian Migrant Workers and their ‘Ethnic Communities’ in Taiwan, 『桃山学院大学社会学論集』49-1: 27-49.
- Lan, Pei-Chia, 2006, *Global Cinderellas: Migrant Domesitics and Newly Rich Employers in Taiwan*, Durham: Duke University Press.
- National Immigration Agency, 2017, *Foreign Residents by Nationality*. <https://www.immigration.gov.tw/lp.asp?ctNode=29986&CtUnit=16677&BaseDSD=7&mp=2>（最終確認2017年3月19日）
- Rapport, N. and A. Dawson (eds.), 1998, *Migrants of Identity: Perceptions of Home in a World of Movement*, Oxford: Berg.
- Retno Widyastuti, 2014, *Social Relations and Interactions of Muslim Ethnic Minorities in Taiwan: Case Study of Indonesian Muslim and Chinese Muslim*, International Master’s Program in Asia-Pacific Studies, National Chengchi University（国立政治大學）
- Tseng, Y. and Lin P., 2014, Through the Looking Glass: Migration into and out of Taiwan, in Chiu, K., D. Fell and Lin P. (eds.), *Migration to and from Taiwan*, Abingdon: Routledge.

参考文献（日本語・中国語）

- 大塚和夫ほか編，2002，『岩波イスラーム辞典』岩波書店。
- 木村自，2003，「移民と文化変容——台湾回民社会における聖紀祭礼の変遷と回民アイデンティティ」『年報人間科学』24-1: 49-65。
- ，2004，「モスクの危機と回民アイデンティティ——在台湾中国系ムスリムのエスニシティと宗教」『年報人間科学』25: 199-218。
- ，2009a，「台湾回民のエスニシティと宗教——中華民国の主体から台湾の移民へ」『国立民族学博物館調査報告』83: 69-88。
- ，2009b，「離散と集合の雲南ムスリム——ネイション・ハイブリディティ・地縁血縁としてのディアスポラ」白杵陽監修『ディアスポラから世界を読む——離散を架橋するために』明石書店。
- 小池誠，2012，「台湾におけるエスニック・メディアが作り出すインドネシア女性労働者のネットワーク」『国際文化論集』46: 1-31。
- 小池誠，2013，「インドネシア人帰還移民の社会福祉活動——台湾からインドネシアへ」伊藤真編『東南アジアにおける人の移動と帰還移民の再統合に関する社会人類学的研究』平成22年度～平成24年文部科学省科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書，首都大学東京社会人類学研究室。
- 徐幼恩，2014，「台湾のアジア花嫁——高雄市における生活適応を中心として」桃山学院大学文学研究

科博士論文。

中華民國內政部戶政司，2015，「各縣市外裔，外籍配偶人數與大陸（含港澳）配偶人數按證件分」<http://www.ris.gov.tw/346>（最終確認2017年3月19日）

（2017年3月31日受理）

“Home-making” in Taiwan: Indonesian Muslims’ Activities

KOIKE Makoto

This is the second report of the Research Project titled “Interdisciplinary Study of Mutual Cultural Exchange between Japan and Indonesia,” which was supported by the Research Institute of St. Andrew’s University from 2013 to 2015. The aim of this paper is to examine how Muslim migrant workers from Indonesia have made their ‘homes’ in Taiwanese cities. The concepts of ‘home’ and ‘home-making’ have been influenced by the discussion in *Migrants of Identity: Perceptions of Home in a World of Movement* edited by Rapport and Dawson (1998). In terms of globalization, Taiwanese society has changed drastically since the early 1990s as a result of two major streams of migrants. The first wave of migrants consisted of contract workers from Southeast Asian countries. These workers were mainly Thais and Filipinos, but they were followed by Indonesians from the 2000s and soon surpassed by them in numbers. Over 80% of the Indonesian workers, numbering 154,596 in 2010, are women who look after the elderly as caregivers and live in their employers’ homes. The second wave consisted of Chinese and Southeast Asian women who married local Taiwanese men. Two thirds of the marriage migrants are from Mainland China, and the rest are mostly from Southeast Asian countries, such as Vietnam, Indonesia and Thailand. Also, there are Indonesian students, whose number is much less than the above-mentioned Indonesian migrants. Most Indonesian workers and students living in Taiwan are Muslim. Based on Islamic beliefs and teachings, they have formed Muslim organizations to conduct religious and social activities aimed at mutual aid, helping other Indonesian workers facing serious problems. Worker and student organizations sometimes cooperate with each other to hold training courses for Indonesian female care workers. Focusing on two mosques in Taoyuan city, Longgang Mosque in Zhongli district and At-Taqwa Mosque in Dayuan district, this paper discusses how Indonesian Muslims have made their ‘homes’ despite being aliens in Taiwan. Longgang Mosque was built in 1964 by Taiwanese Muslims who originally came from Yunnan, China. One of the Indonesian Muslim organizations, FOSMIT, uses a vacant room in the mosque to conduct its religious activities. Though the mosque is the core of Islamic identity for Taiwanese Muslims living in Zhongli, Indonesians use the mosque as their ‘home,’ where they intimately talk with each other in their native language and eat their favorite foods. In 2013 At-Taqwa Mosque was built by a former Indonesian worker and her Taiwanese husband, who converted to Islam when he got married. Many Indonesian workers donated money to build the mosque. On August 23, 2014, when I interviewed some of the staff members of the mosque, after a performance of Javanese Islamic music with *rebana* (a Malay tambourine), a recitation of Yasin

verse from the Al-Qur'an was performed, with a total of eighteen Indonesian workers in attendance. Because most of the attendants were from East Java, at the end of the ceremony, an Islamic leader (*ustad*) gave an Islamic sermon in Javanese, not Indonesian. The mosque became a 'home' filled with a Javanese atmosphere. Indonesian Muslims in Dayuan have succeeded in making their own 'home.'